
兄ちゃんは悪の大幹部！？

雷紋寺 音弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

兄ちゃんが悪の大幹部！？

【Nコード】

N0335M

【作者名】

雷紋寺 音弥

【あらすじ】

弱小劇団に所属しつつ、遊園地のヒーローショーで『中の人』のアルバイトをしながら生計を立てる青年、柚木諒。

自分が出演するショーに同じ劇団に所属する双子の悪ガキ小学生を招待するが、そのことだと思いがけず少年達の夢を裏切ってしまう…。

お馬鹿劇団シリーズ第二段。

今回は少しだけ真面目な話。

劇団日影。^{ひかげ}都内某所のおんぼろアパートを改造して作った稽古場兼事務所を持つ小劇団。

かつては舞台俳優として名を馳せた男、日影総一郎^{ひかげそういちろう}を創設者にしたものの、その知名度の低さから、経営は常に火の車。団員には未成年者も多く、児童劇団に毛の生えたとは思えないような構成員。

しかし、自称元大物舞台俳優の眼は伊達ではなく、団員たちは極めて個性的な者ばかり。良くも悪くも、一芸に秀でているような者が多いのだ。

大舞台で最高の傑作を演じる夢とは裏腹に、今日も事務所には騒動の嵐が吹き荒れるのである。

少年であれば、誰しも一度はテレビのヒーローに憧れた事があるだろう。特殊なアイテムで変身し、人間よりもはるかに優れた能力を駆使して悪い怪人や怪獣をやっつける。そんな彼らの姿に尊敬の眼差しを送ったことがあるはずだ。

時が流れ、少年はやがて大人になる。そうすると、かつてのヒーロー達への憧れもまた失ってゆくのが普通である。少年たちにとつての英雄は現実世界の人間へと移り、スポーツ選手や著名なアーティストに憧れるようになるのだ。

だが、もしも、自分たちの身近にヒーローの世界と関わりを持つ人間がいたらどうだろう。例え舞台の上だけとはいえ、ヒーロー世界の住人になれる人間がいたとしたら。幼き日の憧れはより身近なものとなり、いつまでも色あせずに残るに違いない。

劇団日影の事務所にて、柚木諒はその日の稽古を終えて着替えを始めていた。稽古着でもあるジャージを脱ぎ、そのままスポーツバツグの中に押し込んだ。

劇団の稽古がない日は、諒はスタントマンのアルバイトで生計を立てている。スタントといっても遊園地のヒーローショーで登場する、ヒーローや怪人の中の人を演じるレベルのものだ。プロのスーツアクターではないため、テレビのヒーロー番組などにはザコキャラの戦闘員としても登場したことがない。

しかし、それでも諒の体が演技のために鍛え上げられているのは確かであり、アマチュアの格闘家顔負けの筋肉を誇っていた。

スーツアクターとしてのスタントマンは、時にアクロバティックな演技を要求されることもある。そのため、やたらに鍛えて筋肉をつければよいというものではない。ボディビルダーのような体型になつてしまうと、今度は細やかな動きができなくなってしまうからだ。

細身だが確かに鍛え上げられた肉体。諒の体を体言するなら、まさにその言葉がふさわしかった。浅黒い肌と某男性アイドル事務所に所属するタレント顔負けの容姿も相俟って、何もしなくてもさぞかしモテることだろう。

（そういえば、明日はバイトの日だったな。今夜は寝る前に、ステージでの殺陣を確認しておくか……）

少々くたびれた感のあるシャツに体を通しながら、諒がふとそんなことを考えたときである。

「リョウ兄ちゃん、みつけ！！」

けたたましく扉を開け放ち、小さな影が二つ、諒の後ろから飛びついてくる。彼らにしてみれば全力のタックルだったようだが、諒はそれをいとも容易く受け止めた。

「その声は、蓮^{れん}と健だな？ 相変わらず、元気が有り余ってるみたいだな」

後ろから飛びついてきた小さな少年達の頭に手を乗せて、諒はその髪の毛をくしゃくしゃとかき回した。

杉崎兄弟。一卵性の双子でありながら、お調子者で行動派な兄と頭脳派な弟というまったく正反対の性格をした兄弟である。顔や声はそっくりだが、中身はあまり似ていない。世間一般が持つ、まったく瓜二つの双子というイメージとはやや異なっている。

しかし、根っこの部分は基本的に変わらないのか、いざという時に見せるユニゾンの効果はもの凄いものがあつた。二人して一糸乱れず同じような動きをすることから、分身の術や鏡の演技といった面で重宝がられている。問題は、そのユニゾンが最も効果を発揮するのが、彼らの悪知恵が生む悪戯においてであるということなのだが。

「ねえ、リヨウ兄ちゃん。また、いつものアレやってよ」

「おいおい。アレって言われても分かんねえぞ。何をして欲しいのか、ちゃんと言ったらやってやる」

「そんなの決まってるじゃん！ ファイブレンジャーの決めポーズだよー！」

兄である蓮の口から出たのは、日曜の朝に放送している五人組のヒーローの名前だ。何を隠そう、諒が遊園地でやっているヒーローショーも、そのファイブレンジャーのものなのである。

ショーを成功させるには、自分だけが演技を覚えればよいというものではない。いつ、誰が、どこで何をするかまでをしっかりと頭に叩き込まねばならないため、他人の動きや台詞まで覚えるのが基本となる。

弱小劇団の所属とはいえ、諒も役者の端くれだ。自分が演ずるかどうかは別にして、ステージに登場するヒーローや怪人の演技は一通り頭に入れていた。無論、それにはファイブレンジャーが登場する際の名乗りや決めポーズも含まれている。

明日のことを考えると、本当は早めに帰って殺陣の練習をしたかった。しかし、なにぶん相手はまだ小学生である。ここで冷たくあしらってしまうのも気が引けて、諒は仕方なしに双子のリクエストに答えることにした。

灼熱の戦士だの、深海の騎士だのといったヒーロー達の二つ名を名乗りながら、諒はそれ自体に何の意味があるのかも分からないポーズをとり続ける。実際に敵がいる戦場でこんな風に名乗りを上げ

ていたら、その間に集中攻撃を食らってしまうだろう。子ども相手の演技ながら、あまりにナンセンスな設定に思わず苦笑する。

だが、そんな諒の気持ちとは反対に、蓮も健も手を叩いて喜んでた。大人である諒が本気で演技をすることで、テレビの中の存在でしかないヒーローが身近にいるような気持ちになっているのだろう。

「すごいよ、リョウ兄ちゃん！　よく、あんなに複雑なポーズを覚えられるよね！！」

「まあ、これが仕事だからな。長い間見ていると、人の演技でも全部頭に入っちゃうんだよ」

「そうなんだ……。じゃあ、今度はグランドレンジャーのポーズもやってよ。あれは五人のポーズとはかなり違うから、ちょっと難しいよ」

一通りの演技を終えたところで、弟の健がここぞとばかりにリクエストを追加した。

昔はどうだか知らないが、最近では戦隊ヒーローが六人や七人で戦うことも普通らしい。要するに、番組が進むにつれて強化案の一つとして戦士が追加されるということなのだが、単なる人員増で終わらないのが追加戦士の宿命だ。

後から参入しながらも、初登場時は現行の戦士を凌駕する強さを見せねばならないのが追加戦士である。ただでさえ後から加わった存在なだけに、初回でアピールしなければ個性が埋没してしまうからだ。

そういつた諸々の理由により、追加戦士は変身ポーズから装備、果ては所有している巨大ロボットまで独自のものとなっていることが多い。それだけに格好よさも際立つのだが、演じる方としては大変である。

「グランドレンジャーか……。あれ、最近仲間になったばかりのやつだよな。さすがにちよつと、俺もうる覚えな部分が多いんだよね……」

「そっか……。まあ、そういうことなら仕方ないよね」

「悪いな、リクエストに答えられなくて。今度の稽古までには、六人目の変身ポーズも覚えておくようにするよ」

そう、口では言ってみたものの、諒はグランドレンジャーのポーズを覚えるための方法などまったく思いついていなかった。それ以前に、実はグランドレンジャーがどんなキャラクターなのかさえも、あまりよく知らないのだ。

諒の記憶が正しければ、六人目の追加戦士が番組に登場したのはつい二週間ほど前のことだ。そのため、当然ステージ用のスーツなど用意されておらず、ショーに六人目が登場する予定もない。もう少し話が進めばショーの内容を変えて登場するのかもしれないが、恐らくそれは、夏休みの行楽シーズンに合わせたものとなるだろう。

バイト仲間に六人目を演じる者がいない以上、変身ポーズに関してはテレビを見て覚えるしかない。が、しかし、肝心の放送時間である日曜の朝は、諒にも仕事の予定が入っている。

ヒーローショーを演じる役者がショーのために原作の番組を見る時間がないという現実。なんだか本末転倒な気がしないでもないが、それでも仕事なのだから仕方がない。問題は、どうすれば杉崎兄弟をがっかりさせないで済むのかということだ。

ポーズを覚える術がない以上、できない約束をしてごまかすのはよくないだろう。いざ来週になってから、「やっぱりできませんでした」などというのは、あまりにも酷なことである。

子ども相手でも、いや子ども相手だからこそ、嘘をつくのは良いことではない。同時に、自分に対して一種の憧れを持っている少年たちを、無闇にがっかりさせるのも気が引ける。

考えに考え抜いた末、とうとう諒は一つの提案をすることにした。子どもたちをがっかりさせず、かつ納得してもらえそうな妥協案だ。

「なあ……。蓮も健も、今週の日曜日は予定が空いているか？」

「えっ？ まあ、特に何の予定もないけど……。どうしたの？」

「いや、それなんけどさ。俺、仕事の都合で六人目のポーズまで覚えていられる余裕がないんだよな。だから、代わりと言っちゃあアレなんだが……。俺のやってるステージを、今度見に来ないか？」

「えっ……。でも、父さんや母さんがなんて言うかなあ……」

「そこところは心配いらねえよ。遊園地の入園料くらいは俺が出してやるし、ショーの時間以外は俺も同伴するからさ」

「そっか！ それなら大丈夫だな、蓮」

「ああ。まさか、リヨウ兄ちゃんのステージがタダで見られるなんて……。これって、もしかしてメツチャラッキーなんじゃない？」

諒のからの提案を受けて、思わずにやりと笑う蓮と健。彼らにしてみれば、これは願ったり叶ったりだ。

六人目の変身ポーズなど、いずれは諒も覚えてくれることだろう。それよりも、諒の出ているステージをこの目で見れるということの方が何倍もうれしかった。

諒がアクロバティックなアクションを得意としていることは、蓮も健も稽古の様子からなんとなくは知っている。が、実際の舞台で彼のアクションを眺める機会は少なかったため、いつかは観客として本物のアクションを見てみたいと思っていたのだ。

悪戯盛りの双子の少年は喜びを隠し切れず、何度もハイタッチを繰り返しながら更衣室の外へと走り出て行った。

日曜日。

柚木諒は約束どおり、杉崎蓮と健の兄弟を都内某所にある遊園地につれてきていた。諒が保護者代行で同伴するということで、蓮と健の両親も彼らが出かけることを承諾してくれた。

まったくもって、束縛の緩い親である。そう思った諒だが、もし

かすると単に子守を押し付けたかっただけなのかもしれない。

杉崎兄弟は、現在小学校四年生。遊びたい盛りな年頃故に、休日
を一日大人しく家の中で過ごすなどということはまずないだろう。
暇さえあれば、「どこか連れて行け！！」が口癖である。

そんな彼らをまともに構っていても、両親たちも身が持たない。
たまの休みに毎週の如く出かけていては、財布の中身も寂しくなる。
今回、諒が提案したことは、彼らの両親からしても願ってもないこ
とだったのかもしれない。

（なんだかんだで、今日は杉崎家への大サービスデーになっちまっ
たな。まあ、たまにはこういう日があってもいいだろ）

ショーの始まる時刻までは、まだかなりの時間を必要とする。が、
着替えや準備を考えた場合、そろそろ楽屋に入らないとまずいだろ
う。朝一番、開園と同時に門をくぐったのは、彼が朝一番のショ
ーで舞台上がるからに他ならない。

「それじゃ、俺は楽屋に行ってくるからな。その間、こいつらの面
倒は頼んだぜ」

そう言っ、て、諒は蓮と健の二人組みを、一緒に同行していた少女
に預けていった。

安藤奈津。あんどうなつ アンドーナツの愛称で呼ばれる、諒と同じ劇団日影に
所属する団員だ。菓子パン同然の愛称で呼ばれることに以前は抵抗
があったようだが、今はそれほどでもないらしい。

今回、彼女が諒や杉崎兄弟に同伴した理由。それは、人助けに協

力して欲しいという諒の頼みを聞いたからに他ならない。

現役女子高生が日曜の早朝から遊園地で子どものお守りとは、なんと色気がないものである。だが、諒には以前に世話になった貸しもあつてか、彼の頼みを無下にするわけにもいかなかった。

いつもは喧嘩仲間でしかない諒であるが、本当は義理堅い性格であるのを知っている。何を隠そう、自分の愛称に対するコンプレックスを払拭してくれたのも、他でもない諒なのだ。口ではあれこれと言っているが、諒のことが嫌いなわけではない。

「ねえ、奈津姉ちゃん」

諒に置いていかれてしまった蓮が、その場に立ち尽くしている奈津の腕を引っ張った。

「えっ……？ ああ、ごめん！ ちょっと、考え事してた」

「しっかりしてくれよな、姉ちゃん。リョウ兄ちゃんがない間は、姉ちゃんが俺たちの面倒見るって約束だろ？」

「まあ、それはそうだけど……面倒見てもらう側が言う台詞じゃないわよね？」

「げっ、バレてた!？」

「当たり前でしょ。まったく、二人とも口ばかり達者なんだから……」

小学校四年生にしては、蓮と健はやけに口が達者だ。大人の中に

混じって劇団の稽古などを続けているからか、自分よりも上の世代の人間と関わることも多いからだろう。

だが、それでも遊園地のヒーローショーを楽しみにしているところなどは、まだまだ子どもの部分を残している。双子の少年の耳年増ぶりに苦笑しながらも、奈津は二人の手を引いて園内にあるアトラクションへと向かっていった。

「ねえ、奈津姉ちゃん。俺たち、リョウウ兄ちゃんのショーが始まるまで、どうしてればいいの？」

「そうね……。まあ、時間もあることだし、とりあえずは何か乗り物にでも乗って暇をつぶそうか？ 二人の身長だと乗れるものも限られるけど……。ジェットコースターくらいなら、今の時間だったらそんなに待たなくても乗れそうだしね」

「よっしゃ！ そうと決まれば競争だ！ 行くぞ、健！」

「あつ！ 待てよ、蓮！」

善は急げ。この場合、この言葉を使うのが正しいのかどうかは分からないが、杉崎兄弟は奈津の手を振り切って、ジェットコースター乗り場まで駆け出した。その後を、慌てた様子で奈津も追う。到着早々迷子にでもなられたら、保護者代行をしている者としてはやっつけられない。

「ちょっと！ 二人とも、待ちなさいよ！」

安易な気持ちで同伴を引き受けてしまったが、どうやら今日は一日中、この双子に振り回されることになりそうだ。軽い後悔の念を

覚えながら、奈津は双子の後を追う形でジェットコースター乗り場に駆けていった。

その日は日曜ということもあり、ヒーローショーを行う野外劇場の周りは観客でいっぱいだった。奈津と蓮、それに健が到着したときには、既にかかなりの人数が入り口付近に並んでいたのだ。

並んでいる人間はほとんどが親子連れだが、中には若いカップルの姿もちろはらと見受けられた。休日のデートにヒーローショーを見ろという選択は、奈津にはちよつと理解できない。

だが、よくよく見ると、彼氏の方が自分子ども時代を思い出しながら彼女と語り合っているのに気がついた。要するに、自分の小さい頃を懐かしんで、久しぶりにそんな空気に触れたくなつたからショーを見に来たということだろう。

彼女の方もまんざらではないらしく、どうやら二人して小さい頃の思い出に浸っているようだ。そんな話で盛り上がれるというのは、もしかすると結構うまくやってゆけるカップルなのかもしれない。

（あーあ……。やっぱり双子のお守りじゃなくて、ちゃんとしたデートで来ればよかったかな……）

そんなことを考えてみるものの、今度は誰と来るのかという問題が奈津の頭を掠めた。

自分には、一緒に遊園地に遊びに行けるような彼氏はいない。ならば、自分が一緒に行きたいと思えるような男性はいないものか。

そう考えたとき、ふと諒の顔が奈津の頭をよぎった。が、慌てて首を左右に振ると、今の考えを全力で否定する。

（な、なんで、よりにもよってアイツが出てくるのよ！ 今日だって、アイツの頼みを引き受けたばかりに、この双子に振り回されることになったんだし……）

自分は心のどこかで、諒のことが気になっているのだろうか。いや、そんなことは断じてない。確かに顔やスタイルはちよつと良いかもしれないが、その中身は単細胞の筋肉馬鹿だ。

本人がその場にいたら決して口には出せないようなことを考えながら、奈津は自分の頭に浮かんできた妙な考えを振り払った。

見ると、劇場のゲートが調度開け放たれ、前にいる観客から少しずつ入場を始めている。

「それじゃ、行こっか？ 二人とも、今度は私から離れたら駄目だからね」

この人ごみの中で双子を見失ってしまったら、それこそ見つけるのは至難の業だ。蓮と健にしっかりと駄目押しをして、奈津も劇場の中へと足を進めていった。

ショーの開始には少し早い時間から並び始めたものの、奈津や蓮、それに健が野外ステージの観客席に入った時は、既にかなりの人で座席が埋め尽くされていた。

できるだけ良い席を取りたいと、蓮も健もそわそわした様子で辺りの様子を窺っている。迫力ある戦闘シーンを間近で見たいのであれば、やはり前列の席を確保することが望ましいだろう。

「おつ！ あんなところにベストなスポット発見！！」

「ナイスだ、健！ そうと分かれば、早速ダッシュだぜ！！」

早くも調度よい座席を確保したのか、蓮が健と共に駆け出した。その後を、慌てた様子で奈津も追いかける。見通しの良い野外ステージとはいえ、ここで彼らを見失いでもしたら大変だ。

「ちょっと！ そんなに慌てて走ったら危ないでしょ！！」

そんな奈津の言葉も無視し、蓮と健はコンクリートで造られた階段を跳ぶ様にして下りてゆく。そして、先ほど見つけた座席に向かい、予約の代わりと言わんばかりに持っていた荷物を投げ込んだ。

「よっしゃ、間に合ったぜ！！」

「奈津姉ちゃん！ 早くしないと、席がなくなっちゃうぞ！！」

自分たちの席を確保したためか、蓮と健は調子に乗って奈津を急かした。それにやや遅れるような形で、階段を駆け下りた奈津も合流する。

「アンタたちねえ……。そんなに急がなくなつたって、座席は逃げやしないわよ」

「そんなこと言つて、他の人に席を取られちゃったらどうすんのさ！」

席を取られることよりも、階段で転ぶ方がよっぽど危険だろう。そう言いかけた奈津だったが、喉まで出かけた言葉を強引に飲み込んだ。

時刻は既に、ショーの開始時間となつている。ここはとりあえず席についておかねば、本当にショーを立ち見することになりかねない。

蓮と健の座っている席の一つ後ろの列に、都合よく椅子が空いていた。双子を上から直接見張れる、奈津にとっては良いポジションだ。既に席についている観客の前を申し訳なさそうに通り過ぎながら、奈津はやれやれといった表情で席に着いた。

ショーはまだ始まつていないというのに、なんだかとても疲れた気がする。小学校四年生の男子とは、こうもパワフルな存在だったのか。自分とてまだ高校一年であるものの、やはり年齢のギャップは隠しきれないということだろうか。

男の子を持った母親の気持ちが分かつたような気がして、奈津は思わずため息をついた。まだ二十歳にもなっていないというのに、これではまるで生活に疲れた主婦だ。きっと、こうした日々の繰り返し、麗しき女性をただのオバサンにしてゆくのだろう。

一方、そんな奈津の気持ちなどまったくお構いなしに、蓮と健は諒がショーで演じる役について話し合っていた。

諒は、彼らはもちろん奈津にでさえも、自分が何の役でステージに上がるかを言っていない。それだけに、蓮も健も頭の中で想像を膨らませ、それぞれが好き勝手なことを言っている。

「なあ、健。リョウ兄ちゃん、何の役で出ると思う？」

「さあな。戦闘員ってことはないだろうから、たぶん、レッドがブルーじゃないか？」

「そうだよな。兄ちゃん、イエローやるほど太ってないし……。でも、結構背が高いから、ブラックかもしれないぜ」

「それもあるか……。でも、間違ってもピンクってことはないよな」

「それはないだろ。この間だって、俺たちもピンクの変身ポーズだけは注文しなかったしさ」

「ああ。あの身体でピンクは、さすがに気持ち悪いよな」

そんな他愛もないおしゃべりをしていると、突然、舞台の上に司会のお姉さんが現れた。どうやら、いよいよショーが始まったようである。

「みなさん！ こんにちはー！！」

お約束のご挨拶をするお姉さんに、観客の子どもたちも一斉に挨拶を返して答えた。その後、お姉さんが本日登場するヒーローを紹介

介すると言つて話を進めるが、それは舞台の上で唐突に爆発が起きた事で遮られる。

よくよく見れば、シヨボーイ花火が上がった程度でしかない火花と煙。しかし、それでも観客席にいる子どもたちを驚かせるには十分だった。爆発と同時にステージの脇からたくさんの戦闘員が出現し、瞬く間にお姉さんを取り囲んで人質とする。いよいよ、本格的にシヨーが始まったのだ。

「ふっふっふ……。この会場は、俺たちダイアークが乗っ取った！地球人類抹殺作戦の手始めとして、まずはこの会場にいる人間から皆殺しにしてやる！！」

戦闘員を引き連れて現れた、コウモリのような姿の怪人が高らかに叫ぶ。

地球人類抹殺を掲げていながら、その手始めとしては規模が小さすぎるのではないか。そう思いたい気持ちは分からないでもないが、ここで突っ込んではいけないのだろう。これはあくまでお芝居であり、怪人の台詞は観客を舞台の世界に引き込むためにあるのだから。

コウモリ怪人の命令で、戦闘員たちが手にした武器を振り上げて奇声を発した。このままではステージから飛び降りて、本当に子どもたちを襲わんばかりの勢いである。

だが、これはあくまで劇である。お約束の通り戦闘員たちの前に無数の火花が散り、彼らはそれによって行く手を遮られた。

「待て！ 貴様らの好きにはさせんぞ、ダイアーク！！」

どこからともなく声が聞こえ、ステージの更に後方に見えるジェットコースターのレールの上を車両が走ってくる。その車両の先頭に、赤い服を着た戦士が銃を構えて乗っていた。ようやく今回の主役、ファイブレンジャーの登場というわけだ。

ある者は舞台の袖から、またある者はステージセットの頂上から、次々とファイブレンジャーの面々が登場してゆく。最後にジェットコースターに乗ったまま去っていったレッドが合流し、五人の戦士がポーズを決めたところで五色の派手な爆煙が立ち昇った。

「すっげー！　なあ、健……。あの中の、どれがリョウ兄ちゃんなんだろう？」

「わ、わかんないよ、そんなこと……。とにかく、戦っているところを見て考えようぜ？」

スーツとマスクに覆われた姿からは、五人の中のどれが諒なのかは分からない。が、アクロバティックなアクションを特異としている諒ならば、きっとそれを活かした演技をするはずだ。

戦闘員との混戦が始まると同時に、蓮も健もヒーローたちの動きをしつかりと目で追った。当然、諒の演技しているのが誰なのかを見逃さないようにするためだ。

レッドが手にした剣をふるい、次々と戦闘員を斬り倒してゆく。ブルーとブラックは得意の空手や中国拳法を駆使し、これまた戦闘員を殴り倒してゆく。その後ろではイエローが自慢の怪力で数人の戦闘員をまとめて投げ飛ばし、ピンクが合気道のような技で相手をいなしてゆく。

まさに、テレビの中のヒーローがそのまま現実に飛び出してきたような光景。が、しかし、蓮も健もどこか訝しげな表情で彼らの活躍を見つめていた。

剣技にしても格闘技にしても、諒であれば体操選手のような動きを活かした殺陣を行うはずだ。しかし、目の前のファイブレンジャーにはそれがない。格好よいことには違いないのだが、どこか諒の演技とは異なっている気がする。それは、いつも劇団の事務所で彼の演技を見慣れている杉崎兄弟だからこそ分かるものだ。

「なあ、健……。本当に、兄ちゃん出てるのかな……」

「うん……。まさか、あのコウモリ怪人の中に入ってるとは思いたくないけど……」

期待とは裏腹に、ステージの上に立つ諒の姿を見つけれない蓮と健。そのことが彼らを余計に焦らせ、つい要らぬことを考えてさせてしまう。

諒は、本当にこのステージに出ているのだろうか。そんな不安が二人の頭をよぎったとき、再びステージの上で爆発が起こった。戦闘員をあらかた片付けて油断していたのか、今まで優勢だったファイブレンジャーがまとめて吹き飛ばされてしまう。

「はっはっはっ！　そこまでだ、ファイブレンジャー！！」

ステージの中央に用意された大扉が開き、中から白い煙と同時に漆黒の鎧を身にまとった男が現れる。髑髏をあしらった悪趣味な飾りと、白塗りに青のラインが際立つ奇抜なメイクが印象的だ。手にした剣には毒蛇がまきついたような装飾が施しており、男が悪人と

いうことは誰が見ても明白だった。

「き、貴様は……暗黒剣士ガロア……」

剣を片手に立ち上がったレッドが男を指して言った。

「その通りだ。のこの死にやってくるとは好都合。ここを貴様たちの墓場にしてくれる……」

お約束の台詞を吐きながら、暗黒剣士が高々と剣を天に掲げた。すると、またもやステージに設置された隠し扉が開き、今度は中からグロテスクな姿の怪人たちが次々と出現する。

「こいつらは、今まで貴様たちに倒されてきた怪人を蘇らせたものだ。さあ、再生怪人軍団よ……。積年の恨み、今こそ晴らすときだ……」

大幹部の命令を受け、怪人たちが一齐にファイブレンジャーに襲い掛かる。戦闘員相手とは勝手が違うのか、一対一の戦いではファイブレンジャーの方が押されているようだ。

優勢だったヒーロー達が、一転して大ピンチに陥る展開。普通であれば、ここでは手に汗を握りながらファイブレンジャーを応援するところなのだろう。

だが、そんな子どもたちの中にあつて、蓮と健だけは呆然とした様子で舞台の上で起こっていることを眺めていた。ステージではヒーローと怪人の死闘が続いているが、そんなものは既に頭に入らないといった状態である。

「なあ、健……。あのガロアって……」

「うん……。あれ、リヨウ兄ちゃんだよな……」

見間違えるはずはなかった。

厚いメイクと黒い鎧に隠されていても、隠し切れない部分は必ず存在する。いつも見慣れた諒の瞳。あれだけは忘れるはずはない。目の前で台詞を言っている大幹部の声もまた、間違いなく諒のものである。

自分達の慕っていた尊敬すべき兄貴分が、敵の大幹部として現れた。頭では演技と分かっているものの、やはりどこか受け入れがたいものがある。

「なんだよ、リヨウ兄ちゃん……。なんで、兄ちゃんがガロアなんだよ……」

あまりのことに信じられず、蓮が思わず口にした。健は何も言っていないが、恐らく同じ気持ちだろう。

更衣室や楽屋裏で、暇なときは色々なヒーローの物真似で二人を楽しませてくれた諒。彼は本物のヒーローではなかったが、蓮と健にとっては間違いなくヒーローだったのだ。

そんな諒が、楽しみにしていた舞台で悪の大幹部として登場する。それは、今まで諒を慕っていた蓮と健にとって、あまりにショックな出来事であった。

「兄ちゃんは……ヒーローじゃなかったんだ……」

そう呟いたのは健である。今まで散々ヒーローの物真似を見せてもらっていただけに、なんだか凄く裏切られた気分だった。

それから先は、何がどうなっていたのか蓮も健も良く覚えていなかった。諒が悪の大幹部役だと気づいてからは、それが気になってまともにシヨーの中身に集中できなかったのだ。

最初は優勢にあった再生怪人軍団も、ファイブレンジャー達の底力の前に少しずつ劣勢になってゆく。それを見た諒のガロアが再び司会のお姉さんを人質にとるが、ブルーとピンクによって簡単に奪還されてしまう。

やがてシヨーは終盤に近づき、ファイブレンジャーがそれぞれの必殺技で再生怪人軍団を倒していった。諒の演じる暗黒剣士ガロアもまた、レッドとの一騎打ちに敗れて退場する。

「これでとどめだ！ 行くぞ、みんな！！」

レッドの合図と共に、ファイブレンジャーはそれぞれが手にした専用の武器を合体させて巨大なバズーカを作り出した。最後に生き残ったコウモリ怪人に向けて五人の力を合わせた必殺技が炸裂し、爆発の煙に紛れてコウモリ怪人が退場した。

「お、おのれえ！ こうなったら巨大化して、ここの観客もろとも踏み潰してくる！！」

倒されたはずのコウモリ怪人の声が響き渡り、ステージの上に巨大なハリボテが出現した。それを見たファイブレンジャーの面々も舞台から撤収し、今度は彼らの駆る巨大ロボットのハリボテが出現

する。

番組の再現とはいえ、所詮はハリボテ。肉弾戦などできるわけもなく、その場で巨大な爆発が起こって終わりである。

「おのれ、ファイブレンジャー！ この借りは、必ず返してやる！ 覚えていろ！！」

駄目押しとばかりに、諒の演じる暗黒剣士ガロアが再び現れて捨て台詞を放つ。が、すぐにマントを翻して退場し、ショーはファイブレンジャー達が最後の決めポーズをしたところで終わりを告げた。

「よう！ 待たせたな！！」

仕事を終えた諒は楽屋から飛び出ると、野外劇場の入り口付近で待っていた蓮と健に声をかけた。自分でも、今日のショーは今までの中でも最高のできだったと思う。それだけに、蓮と健の反応も気になるところだ。

だが、そんな諒の期待に反し、二人の口から発せられたのは辛辣な言葉の嵐だった。

「リョウ兄ちゃんの嘘つき！ 裏切者！！」

「お、おい……。どうしたんだよ、蓮……」

「リョウ兄ちゃん、なんでガロアなんてやったんだよ！　どうして兄ちゃんが、ファイブレンジャーじゃないんだよ！！」

「あちゃあ……。メイクで分かんねえと思ってたけど、バレてたか……。でも、俺の演技も結構かつこ良かっただろ？　セットの上からジャンプしてレッドに斬りかかるところなんて、何時間も練習したんだぞ」

「知らないよ、そんなこと！！」

楽しんでくれたと思った諒の気持ちとは反対に、蓮も健も完全にへそを曲げてしまっていた。あまりの態度に見かねた奈津がフォロ―を入れようとするものの、それさえも聞き入れる様子はない。

「俺達……。楽しみにしてたのに……。リョウ兄ちゃんが、レッドやブラックになってかつこ良く戦うところを見るの……。楽しみにしてたのに……」

そういう健の目には、うつすらと涙が光っていた。

自分の知り合いが、舞台の上でといえ悪人を演じる。それは、まだ小学生でしかない蓮と健にとっては残酷な現実以外のなにものでもなかった。その事実に気づき、諒も自分の行いが彼らに与えてしまったことを知って言葉を失う。

今までも、諒が舞台の上で悪人を演じたことは何度かあった。その場には、当然のことながら杉崎兄弟も居合わせていたため、諒は今回のことも軽く考えていた節があったのだ。

だが、そんな彼の考えは、今になって思い違いであったということこ

とが分かった。今までは同じ役者として舞台に立っていたが、今回は蓮も健も観客として諒の演技を見ることがなったのだ。

役者の視点と観客の視点。その違いを十分に考慮せず、幼い後輩を傷つけてしまった。さすがの諒も、これには返す言葉もない。ただ一言、「すまん……」と告げるのが精一杯だった。

翌日、諒は重苦しい面持ちでバイト先である遊園地の門をくぐった。今日も朝一番のショーに出演する予定があるため、さっそくその足で楽屋へと向かう

昨日のことがあるだけに、楽屋へ到着してからも気分は晴れなかった。メイクを済ませ、衣装に着替えてはみるものの、やはり剣を握る手に力が入らない。

蓮と健は、あれから諒とは口をきこうとしなかった。二人の中でそれだけ諒に裏切られたという気持ちが強かったからだろう。

子どもたちに夢を当てる仕事をしたい。そう思っただけで遊園地のヒーローショーで働くことを決めた諒だったが、昨日の一件ですっかり自身をなくしてしまっていた。自分は本当に、子どもたちに夢を与えることができていたのか。もしかすると、それは単なる自己満足に過ぎなかったのではあるまいか。

悪役は、所詮はどこまでいっても悪役だ。ヒーローに倒される側の人間である以上、子どもに夢を与えることなどではしないのだ。

なんとも悲しい現実だが、諒はそれも仕方ないことなのかもしれないと思った。

「俺的にはかつこ良くやってるつもりだったんだけど……結局、悪者は最後まで嫌われ者ってことか……」

まるで、自分がハエかゴキブリのようなものになった錯覚に陥った。どんな役でも敬意を払って演じなければならないというのは分かってはいたが、頭の中で割り切るだけでは納得のいかないものも存在する。

気持ちの切り替えも済まないまま、諒は作り物の剣を片手に楽屋を出た。そのまま野外ステージに置かれたセットの裏に隠れ、そこで自分の出番を待つ。外の舞台では、戦闘員相手の前座が調度終わったところだった。

頭の中で殺陣の流れを簡単に思い起こし、諒は剣を片手に舞台へと舞い降りた。隠し扉が開き、白い煙と共に諒の演じる暗黒剣士ガロアがステージに姿を現す。

「はっはっはっ！　そこまでだ、ファイブレンジャー……！」

舞台の上で倒れているファイブレンジャー達に向かい、諒は昨日とまったく同じように台詞を言った。練習の時から幾度となく言い続けてきた台詞である。例え気持ちが乱れていても、舞台の上で台詞を間違えることはない。

「き、貴様は……暗黒剣士ガロア……！」

「その通りだ。のこの死にやってくるとは好都合。ここを貴様

たちの墓場にしてくれる!!」

段取り通り、レッドとのやり取りを済ませた後、諒はガロアとして再生怪人軍団を呼び出した。舞台の様々な箇所から怪人が現れ、ファイブレンジャーと戦いを始める。その後も戦闘員や怪人を要り混ぜながらの混戦が続き、徐々にファイブレンジャーが優勢となつてゆく。

必殺技を受け、次々と倒されて退場してゆく怪人たち。ショーはいよいよ終盤にさしかかり、ファイブレンジャーのリーダーであるレッドと、諒の演じるガロアが一對で戦うシーンへと突入した。

作り物の剣が交差するたびに、野外劇場に設置されたスピーカーから鋭い金属音が発せられる。ヒーローの隊長と悪の大幹部が戦うという白熱した場面だけに、観客の子どもたちも興奮しながら声援を送っている。

だが、そんな大詰め of シーンにおいて、諒は剣を振りながらも未だに迷いを捨てきれないでいた。

（俺の軽率な考えが、あいつらを傷つけちゃった……）

悪趣味な装飾を施した剣が空を斬り、レッドが素早い身のこなしでそれをかわしてゆく。

（俺のやっている役は……子どもに夢を与えることなんて、できないんじゃないのか……？）

諒の振り下ろした剣とレッドの剣が交差して、互いに鍔迫り合いの状態となる。予定していた殺陣では、ここで一度離れて間合いを

とるはずだった。その後、互いに剣を手にしたまま駆け寄って、すれ違いざまに相手を斬りつけるはずなのだ。

だが、間合いを取るためにレッドが剣を振った時、諒の持っていた剣は勢いよく弾かれて宙を舞った。予定になかった事態だけに、ステージにいる全員が呆然とした状態で剣を見る。跳ね飛ばされた剣はステージの手前に転がり、まさに観客の目と鼻の先まで飛ばされてしまったのだ。

アクシデント発生。舞台の裏で眺めていた裏方までもがそう思った。急な殺陣の変更は、役者に不要のアドリブを求めることとなる。それは単に舞台を混乱させるだけでなく、演技の質の低下にも繋がる恐れがあるのだ。

「や、やるな……！　だが、この程度で俺は負けはせん！！」

舞台の前方に転がった剣を目にし、諒はとつさに頭の中で思っていた台詞を叫んだ。同時に身体を転がして、すかさず落ちていた剣を拾う。

「勝負だ、レッドレンジャー！！」

互いの立ち位置が予定とは異なっていたが、そんなことを気にしている場合ではなかった。レッドを演じている役者もこちらに合わせてくれたのか、タイミングを見計らって大地を蹴る。

決着のシーンは、左右からではなく前後から斬り合うようなスタイルとなった。音響にもなんとか合わせることができ、予定通りガロアを演じていた諒は退場する。ここまで来れば、後は通常のシナリオに戻してショーを続けることができるだろう。

ここ一番の場面で思わぬハプニングを引き起こしながらも、その日のショーはなんとか成功をおさめることができた。

午前のショーが終わったところで、諒は楽屋の中で独り頭を抱えていた。

あの時、自分が妙な事で迷っていなければ、剣を落とさずにすんだのだ。アドリブをきかせて舞台そのものは成功させたが、あの剣が観客席まで飛んでいたかと思うとぞつとする。

舞台で使う小道具の一つでしかないとはいえ、激しく振り回し切り結ぶこともある剣だ。本物の刃こそついていないが、子どもの頭にでもぶつかれば大怪我をさせかねない。今日のステージは、本当に危ないところだったのだ。

「よう、柚木。なにやってんだよ、そんなところで」

突然後ろから名前を呼ばれ、諒は思わず振り向いた。見ると、赤いスーツを全身に身まとった男が、頭部のヘルメットだけを外した状態で立っている。先の舞台上でレッドレンジャーを演じていた男だ。

「なんだ、新堂さんっすか。今日の舞台、本当にすいませんでした。なんとか上手くいったから良かったですけど、下手すりゃ大惨事になってたかもしれないですよね」

レッドレンジャーを演じるバイト先の先輩、新堂に、諒は申し訳なさそうに頭を下げた。あの時、新堂が自分のアドリブに合わせてくれていなかったら、シヨールは見るも無残な失敗作と化していたことだろう。

「らしくないな、柚木。お前があの程度の殺陣で失敗するなんて」

「いや、マジで本当にすいません。ちょっと気になる事があって、演技に集中できなくて……」

「劇団に所属しているようなお前でも、そんなことがあるんだな。なんか、悩みでもあんのか？」

「いや、それが……」

昨日の出来事を、諒はかいつまんで新堂に話した。後輩の小学生を楽しませるためにシヨールに招待したのに、彼らは諒の役が悪の大幹部ということへそを曲げてしまった。その一件があったため、自分も今の役を続けることに疑問を感じ始めてしまったということ。

全ての話を聞き終えた後、新堂は納得したように頷いて諒の肩を叩いた。

「いやあ、分かるな、その子たちの気持ち。俺も昔、大好きだったサブヒーローが悪の幹部に殺されちゃった時は、テレビの前で涙を流したよ」

「やっぱ、そういうもんっすよね。子どもにとって格好よく映るの

はヒーローだけ。悪は、どこまでいつても嫌われ者ってことっすからね……」

「まあ、それが世間一般の考えだからな。だが、そんなことで自信をなくしてどうすんだ？　悪役だっていなくちゃ、ヒーローの話は成り立たないんだぞ」

「そりゃ、頭では分かってますけど……。でも、俺が悪役を演じたせいで、あいつらを傷つけたと思うと……やっぱり、どこか吹っ切れなくて……」

「ったく、しょうがねえやつだなあ……」

そう言いながら、新堂は癖毛だらけの頭をくしゃくしゃとかいた。諒は後輩の中でも仕事ができる人間だと思っていたが、愚直すぎるところが玉に傷だ。裏表がないのはいいのだが、その身体に見合わず妙なことで悩んだりする。

「なあ、柚木。そんなに気になるってんなら、いつそのこと悪役を極めちまうってのはどうだ？」

「悪役を極める？」

「そうだ。確かに、姑息で卑怯な手段ばかり使うような悪役は、劇の中でも外でも嫌われるもんだ。けどな、悪役の中でも自分の美学を貫いているような連中は、意外と人気があったりするもんなんだよ」

「そ、そんなもんなんすか？」

「ああ。一言で言えば、悪の魅力ってやつだな。自分の行いに絶対的な自信を持って行動しているやつは、悪役でも光って見える時があんのさ。どっちかって言うと、敵役って言った方がいいのかもしれないねえけどな」

「本当にそうっすかね？ それでもやつぱ、悪役は悪役に過ぎないと思いますけど……」

新堂の話聞いたものの、諒は未だどこか納得していない様子である。それを見た振動は、ついに我慢の限界がきたのだろう。小脇に抱えていたレッドレンジャーのヘルメットを放り投げ、諒に高々と宣言する。

「分かった、柚木。お前がそんなに言うんだったら、今日は俺の家で悪の美学ってやつを見せてやる」

「えっ！？ 新堂さんの家で！？」

「そうだ。幸い、俺は昔の特撮番組をDVD化したやつを何枚か持っているからな。お前も役者なら、それ見て少しは研究しろ」

「はぁ……。そういうことなら、見せていただかないわけにはいかないようっすね」

いくらヒーローショーのスタントをしているからといって、まさかこの歳になってヒーロー番組をビデオ視聴することになるとは思わなかった。が、これも演技の研究と思えば致し方ない。

今日のような失態が続けば、自分はバイトをクビにされかねない。藁をもすがるような気持ちで、諒は新堂の誘いに乗ってみることに

した。

翌週の日曜日、蓮と健は再び諒のバイト先である遊園地を訪れていた。今回も諒からの招待があつたのだが、彼は同伴していない。今日はきちんと、父母の付き添いでやってきている。

蓮も健も、本当は来たくない気持ちの方が強かった。一度見たシヨ―を二度も見せられるというだけでも無意味に思われる上、諒の役はどうせ暗黒剣士ガロアのままなのだろう。

自分の知り合いが悪の大幹部などをやっているところなど、できれば二度と見たくない。が、しかし、諒は先に蓮と健の両親を説得していたらしく、親に連れられる形で半強制的にステージへと連れてこられてしまったのだ。

「なあ、蓮。リヨウ兄ちゃん、今日もガロアで出てくるのかな……」

「たぶん、そうじゃないか？　そう簡単に、シヨ―での役が変わるなんてことはないだろうし……」

いったい何が悲しくて、知り合いが悪役を演じる舞台など見なければならぬのか。そんなことを考えている内に、いつの間にかシヨ―は始まっていた。

ファイブレンジャーが登場して戦闘員をなぎ倒し、爆発が起きて大幹部であるガロアが現れる。声からして、やはり演じているのは

諒のようだ。

「なんだよ……。兄ちゃん、やっぱりガロアじゃん……」

これ以上、見ていたいとは思わなかった。シヨーは中盤へとさしかかり、ガロアの命令を受けた再生怪人軍団とファイブレンジャーが死闘を繰り広げる。

最初は優勢だったものの、徐々に押され始める怪人たち。ファイブレンジャーの必殺技が炸裂し、次々に怪人たちが退場してゆく。

このまま行けば、もうすぐ諒のガロアが現れるはずだ。劣勢に陥った彼が司会のお姉さんを再び人質にとるという、できればあまり見たくないシーンである。

「なんか、来て損したよな、健……」

「だよな。リョウ兄ちゃん、なんで俺たちを二回もシヨーに呼んだりしたんだろ……」

これ以上、ここにはいたくない。そう思って、蓮と健が目を伏せた時だった。

「そこまでだ、ファイブレンジャー！ それ以上動けば、この女の命はないぞ……！」

先週見た時と、台詞そのものはまったく同じだ。が、肝心の演技は先週のものとはまったく異なっていたのである。

先週は、単にお姉さんの前に立って剣を突きつけているだけだっ

た。しかし、今日の諒はそれ以上だ。右腕でお姉さんの首を押さえ込み、左手の剣を喉元に突きつけて脅している。衣装と場面さえ変えれば、凶悪犯が人質をとって立て籠もっているようなシーンに見えなくもない。

「さあ、早く武器を捨てろ！ さもないと、本当にこの女が死ぬことになるぞ！！」

迷いも躊躇いもない冷徹な目で、諒のガロアはレッドを睨んで言った。その迫力に、会場で声援を送っていた子どもたちも思わず黙り込んでしまう。演技と分かっていても関わらず、捕まっているお姉さんまで本当に泣き出しそうな表情になっている。

先週のショーとは違う、確かなポリシーを持った悪役がそこに存在していた。新堂に半ば無理やり見せられたヒーロー番組のDVDのことを思い出し、諒は改めて新堂に感謝する。

あの後、新堂が諒に見せたDVDの中には、確かに悪の美学を感じさせる悪役が存在した。ある者は自分が悪であることを自覚し、兄弟同然に育った親友と戦うことにも躊躇いを見せなかった。また、ある者は、自分の死でさえも恐れずに、戦場で雄々しく散ることを望んでいた。

戦隊ヒーローの悪役は、どこかコミカルで憎めない部分がある。そう思い込んでいた諒にとって、シリアス一辺倒の悪役がいたことは意外だった。が、同時に自分の演技が妙に稚拙なものだったような気がし始め、諒は改めてそれを恥じたのだ。

コミカルな悪役を意識することで、諒は心のどこかで悪役を舐めていた部分があったのかもしれない。シビアな演技をしなくても良

いということ、悪役という存在を甘く見ていたのだ。それが、先日の舞台でのミスや杉崎兄弟に対する軽率な行動に繋がったともいえる。

もう、これ以上の失態を犯すつもりはなかった。

ブルーとピンクによって司会のお姉さんが救出されてからも、諒はあくまでシリアスな悪の大幹部を演じ続けた。レッドとの殺陣も、本気で相手を殺さんばかりの殺気を放って演じ続ける。劇の小道具を使ったチャンバラごっこという意識はなく、本当に相手を斬ることしか考えていない。

既に、ファイブレンジャーに声援を送る観客の姿はなかった。諒の演じるガロアの放つ、あまりに殺伐とした空気。それがショーの緊迫感を高め、子どもたちも息を吞んで戦いの行く末を見つめている。

完全に、舞台と観客が一致した瞬間だった。諒のガロアはステージセットの台座から飛び降り、空中で回転して着地する。ゴテゴテとした鎧を着ているとは思えない身のこなしだ。対するレッドも負けじと剣を構えて飛び上がり、ガロアと激しい剣の応酬を繰り広げる。

ショーも終盤にさしかかり、いよいよレッドとガロアの勝負に決着がつく時がきた。このままゆけば、ショーは大成功の内に終わったことだろう。が、しかし、トラブルの種というものは、いつどこで芽を出すか分からないものである。

レッドとガロアが互いに間を取り、最後の一撃に入らんと剣を構える。先日はここで失敗したが、今日はその心配もない。互いに剣

を構えたまま、脱兎の如く駆け出した。事は、そこで起きたのである。

次の瞬間、諒の足元で突如として謎の爆発が起こった。激しい火花を散らしながら、白い煙が立ち昇る。

ショーの最後で使うはずだった、コウモリ怪人に放つ必殺技。その演出用に仕込んでおいた火薬が、なんの前触れもなしに暴発したのである。

予想外の事態に、観客だけでなく舞台裏にも混乱が走る。コウモリ怪人に予定通りの必殺技を放てなくなったのも問題だが、それ以上に爆発に巻き込まれた諒のことが心配である。

やがて、立ち昇る白い煙が晴れ、その中から諒の演じるガロアが姿を現した。果たして諒は無事なのか。他の観客だけでなく、蓮と健も思わず不安そうな視線を送る。まさか、あの爆発で大変な怪我を負ってしまったのではないだろうか。

だが、そんな彼らの心配とは裏腹に、煙の中からは身じろぎ一つせぬ諒のガロアが姿を現した。その姿を見て、蓮や健を始めとした観客たちが思わず言葉を失う。

諒は、ただ無言のままそこに立っていた。突然の爆発に怯むことも、驚くことさえもなく、無言のままレッドレンジャーをにらみつけていたのだ。

「どうした、レッドレンジャー？ この程度で、俺が倒れるとでも思ったか？」

先日の失敗の時に見せたアドリブとは異なる、圧倒的な自信に満ちた台詞。同じアドリブでも、演者の気持ちが変わればこうも映り方が異なってみえるのかと思えるほどの、圧倒的な存在感。

「す、すげえ……」

あまりのことに、蓮も健も言葉を失っていた。それほどまでに、諒の演じるガロアが発する殺気は強烈だったのだ。

それからの舞台は、再び流れを取り戻した演者たちによって、なんとか成功にこぎつけられた。コウモリ怪人を倒した時に爆発が起きなかったのが少々気になったが、観客はそんなことは気にしていなかった。

やがて、巨大ロボットと巨大怪人の対決シーンを経て、その日のショーは終了した。劇場の観客席を抜け出した蓮と健は、同じく楽屋から出てきたばかりの諒を見つけてたまらず駆け寄った。

「すっげーじゃん、リョウ兄ちゃん！ 今日のガロア、テレビで見てるやつなんかよりも、ずっとかつこ良かったよ！！」

「そうか？ でも、ガロアは悪の大幹部だぞ？ お前達、ファイブレンジャーのファンじゃなかったのか？」

「そうだよ。でも、俺たちの一番のヒーローは、リョウ兄ちゃんさ！ 舞台の上では悪者でも、リョウ兄ちゃんは俺たちのヒーローだよ！！」

そう言うと、蓮と健はそのまま諒の左右の腕にそれぞれ飛びついた。突然飛び掛られてバランスを崩しそうになるものの、そこはさ

すがの諒である。彼らを難なく持ち上げると、そのまま肩の上に乘せて微笑んだ。

「まあ、なんにしても良かったぜ。これで、俺も気兼ねなく仕事を続けられるってものだ」

悪の大幹部が見せる、悪ならではの魅力。蓮と健に、それを少しでも伝えられたことで、諒は役者冥利に尽きていた。

月曜日。

学校の授業を終えて日影の事務所にやってきた蓮と健は、稽古場にて他の団員たちの到着を待っていた。時間であれば、そろそろ諒がやってくるはずである。

「なあ、蓮。そっちの準備、OK？」

「任しとけて。リョウ兄ちゃんがドアを開けたら、この紐を引っ張ればいいんだろ？」

二人の手には一本の紐が握られ、その両端は蓮と健の手にそれぞれ握られている。彼らの頭にはファイブレンジャーのレッドとブルーのお面が乗っており、その前方には水の入った幼児用のビニールプールも置いてある。

扉を開けた瞬間に紐を引っ張ることで、それに躓いたリョウが転

ぶ。転んだリョウはそのままビニールプールに頭から突っ込み、びしょ濡れになるという寸法だ。

先日のショーで、諒は見事なまでに暗黒剣士ガロアを演じきっていた。その印象があまりに強かったために、杉崎兄弟は今日の悪戯を思いついたのだった。即ち、ファイブレンジャーごっこの一環として、諒を嵌めるということである。

「見ていろよ、リョウ兄ちゃん……いや、暗黒剣士ガロア！俺たちファイブレンジャーが、天に代わってお前を討つ！！」

テレビで覚えた台詞をそのままに、蓮が紐を握ったままにやりと笑った。と、なにやらドアノブを捻る音がして、稽古場の扉が唐突に開かれる。

「来た！！」

合図と共に、蓮と健は手にした紐を思い切り引っ張った。扉を開けた人物は豪快に躓き、目の前に置いてあったビニールプールに直撃する。

「どうだ、暗黒剣士ガロア！」

「正義の戦士が負けることは、絶対はないのだ！！」

ビニールプールに倒れている人物に向かい、用意していた勝利の台詞を吐く蓮と健。が、目の前に倒れている人物の姿を見て、二人ともハッと息を呑む。

びしょ濡れになった白いシャツと、豪快にめくれ上がったスカ―

トが見える。倒れているのは諒ではなく、夏の制服姿の女子高生だ。蓮と健の予想に反し、稽古場に現れたのは安藤奈津だったのである。

「やっべえ……。嵌める相手、間違えた……」

「でも、奈津姉ちゃん……以外とダサイパンツ穿いてんだな……」

「うん……。俺たちの母さんの方が、まだ派手なの穿いてるよな……」

問答無用で転ばせておきながら、神をも恐れぬ台詞を吐く杉崎兄弟。思わず奈津が怒りに満ちた表情で立ち上がろうとしたその時、今度は後ろから何やら冷めた視線を送られているのに気がついた。慌てて起き上がると、そこには非常に気まずい顔をした諒が立っている。

「な、なあ……。お前、そんなところで何やってんだ……？」

「何って……この、お馬鹿な双子に嵌められたのよ！ そんなこと、見れば分かるでしょ！？」

そう言っ、何かに気づいた様子で慌てて胸元を隠す奈津。

先ほどの様子からして、諒にスカートの中身を見られたことは間違いない。それだけでなく、水に濡れたシャツに透けて、上の下着まで見られてしまっただろう。間違っても自慢するほどの大きさはない胸であるが、それだけに一層羞恥心が高まる。

「それよりも……諒、アンタ、今の見たでしょ……！」

「えっ……！？」

「うるさい！　よくも乙女の下着をまじまじと眺めてくれたわね！」

「なっ……！　そんなこと言われても、俺だって見たくて見たわけじゃねえよ……！」

「黙れ、この変態！　こうなったら、何が何でも責任とってもらうからね……！」

勘弁してくれ。そう心の中で呟くと、諒は一目散にその場を逃げ出した。事務所について早々、奈津の八つ当たりの被害にあったはたまらない。

逃げる諒の後ろから、怒り狂った奈津が追いかけてくる。その更に後ろでは、ファイブレンジャーのお面をつけた蓮と健が笑っているのも見て取れる。

「こら待て、諒！　人のパンツをただで見て、許されると思ってんのかあっ……！」

他人が聞いたなら誤解を招きかねないような台詞を吐きながら、奈津が執拗に諒を追いかける。そんな奈津から逃げながら、諒はふと自分が昨日のステージで演じていた役を思い出して考えた。

暗黒剣士ガロアは、徹底した悪を貫くダイアークの大幹部である。しかし、そんな彼にも苦手なものは存在するようだ。それは時に、悪の大幹部でさえ簡単にやり込めてしまうだけのパワーを秘めているほど危険なものだ。

即ち、悪の大幹部以上に危険なのは、年頃の女子高生や悪戯盛りの小学生なのではないか、と。

（後書き）

お馬鹿劇団シリーズ第二段。

とはいえ、今回はお馬鹿要素少なめ。

気がつけば、かなりシリアスな話に……。

次回はもう少し、おふざけ要素も入れようかと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0335m/>

兄ちゃんは悪の大幹部！？

2011年1月25日03時22分発行